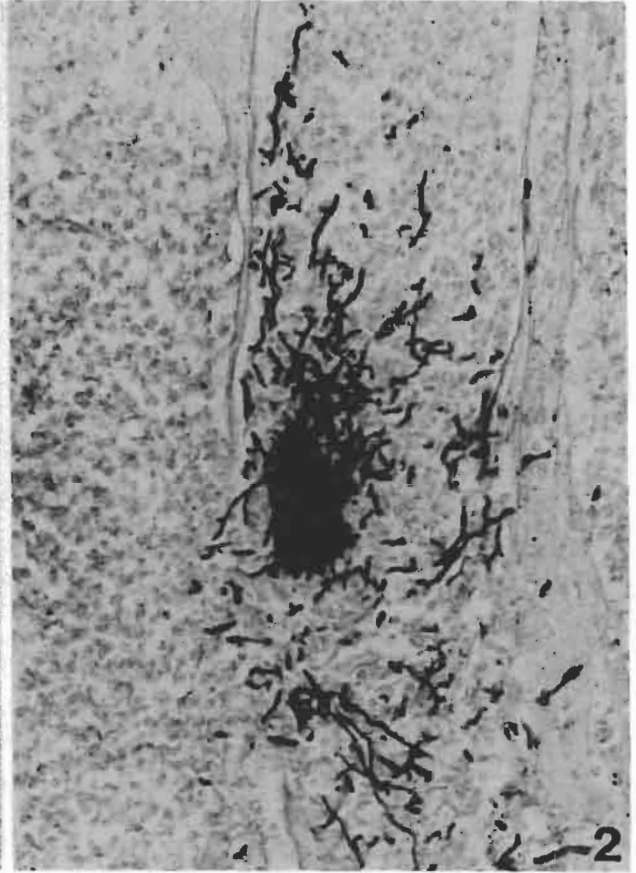


アシカの皮膚

東京農工大学家畜病理学教室出題 第30回獣医病理学研修会標本No.523



動物：アシカ（オタリア）、雄、8歳。

臨床事項：症例は内陸の遊園地でアシカショーに供されていたので、淡水飼育されていた。1983年、皮膚病に罹患し、薬浴などを施しつつ、ショーに供用されていた。皮膚病は脱毛を伴い、ここ2-3年の間に全身性に及ぶようになった。1988年9月には食欲不振、動作緩慢、呼吸粗励、皮膚の発赤もみられるようになり、同年9月26日斃死した。なお、生前(1988年)皮膚からは *Pityrosporum canis* あるいは *Malassezia pachydermatis* (本学内科学教室) 及び *Candida* spp. (斃死2カ月前業者依頼) が分離されていた。

剖検所見：体の両側及び胸部に若干の被毛が見られるのみであった(全身性脱毛)。特に脱毛が目立った背部皮膚は粗剛で、部分的な色素脱落と思われた退色領域があった。また同部には体表を横断する方向に亀裂が多数みられ、一部では血液浸潤がみられた。内部所見では体表リンパ節の顕著な腫大と髄質における淡緑褐色の色素沈着がみられた。右心房及び後大静脈には犬糸状虫27匹の寄生をみた。

組織所見：皮膚の表層には崩壊・浸潤細胞を含む角化及び不全角化上皮の退廃物が厚く堆積していた(写真1, HE)。これら堆積物内には菌塊がみられ、グロコット染色標本では糸状を呈する真菌の増殖が認められた。この菌糸は比較的一定した幅を持ち、隔膜を有し、分岐していた。概して菌糸は表皮層に直接的に浸潤増殖する部位は少なく、むしろ毛包に沿って侵入増殖しているようにみえた(写真2, HE)。かかる部位での表皮層は菲薄で、膨化変性上皮よりなり、好中球浸潤がみられ、びらんあるいは部位によっては潰瘍化の様相を呈し、時には出血を伴っていた。乳頭層には増殖した真菌に対する直接的な組織反応として好中球を中心とする細胞浸潤の部位と、その周辺部におけるリンパ球、プラズマ細胞及びマクロファージの浸潤が存在した。真皮層には拡張した囊胞状腺組織が多数存在し、その腺腔内にはコロイド様物質あるいは赤血球、好中球を含む浸潤細胞を容れていた。この所見は表皮を覆う堆積物による腺導管の排泄障害に起因する変化と考えられた。

診断：慢性肉芽腫性真菌性皮膚炎。